シャンティ山口 ニュースレター　第92号
発行：2011年10月15日/発行責任者：特定非営利活動法人 シャンティ山口　代表 角　直 彦
連絡先事務局 〒753-0215 山口市大内矢田717　佐伯昭夫　電話/Fax 083-927-4083
ホームページアドレス：http://www.shanti-yamaguchi.com/

NGOネットワーク山口スタディツアー報告書

平成23年度「地域実習Ⅰ」

NGOネットワーク山口スタディツアー

「シャンティ学生寮訪問・モンの村環境調査・

子どもたちとのふれあい・自然に学ぶツアー」

～援助について考える～

シャンティ学生寮　2011.8.21

平成23年8月18日～8月26日

山口県立大学国際文化学部国際文化学科2年

淤見悠　神屋有紗　中野理沙

廣實大樹　福田美佐子

目　次

1. はじめに
1.1　背景
1.1.1「フィールドワーク実践論」で学習したこと
1.1.2 参加者の実習先希望動機、および期待される成果
1.2　シャンティ山口のタイ山岳民族支援活動
1.3　スタディツアーの日程・地図

2. 日本とタイの比較

3. ホイプム村環境調査
3.1　ゴミ調査
3.2　農業センター視察

4. 現地での交流
4.1　シャンティ学生寮
4.1.1 寮生との交流
4.1.2 寮生との交流会
4.2　ホイプム村
4.2.1 保育園での交流会
4.2.2 ホームステイ
4.2.3 ホストファミリーとの交流会

5. 本当の援助とは

6. まとめと今後の課題

参考文献・資料

はじめに

1.1　背景

1.1.1　「フィールドワーク実践論」で学習したこと

「地域実習 I」を受講するために、必須科目である平成 23 年度前期に開講された「フィールドワーク実践論」において、特に以下の 5 点について学習した。第 1 に、世界が抱える問題に対して、自分がどのような役割を担う事ができるのか自分の位置付けを認識した。第 2 に、時代の波を乗り越える必要性について習得した。第 3 に、実地踏査される側が被る迷惑について学習し、節度を守り相手を理解することを習得した。第 4 に、インタビュー、アンケート、写真、あるいはビデオを用いて調査をする方法、

および調査して得た情報の分析方法について学習した。第5に、パワーポイントの作成と報告の仕方について学んだ。

スタディツアーの2日間の事前学習では、NGOネットワーク山口副会長であり山口県協力隊を育てる会副会長である荒瀬澄枝氏より援助とはなにかについてのお話と、シャンティ山口事務局長・理事でスタディツアーに同行していただいた佐伯昭夫氏より活動について写真やビデオ、地図、民族衣装、模型などを用いた詳細な説明と、調査や交流会の準備に関して助言をいただいた。

1.1.2　参加者の実習先希望動機および期待される成果

「地域実習Ⅰ」で提示される実習先の中で、このスタディツアーを選択した理由は以下の5点である。まず第1に、自分たちの生活圏とは異なった文化で生活しているタイの人々とのコミュニケーションを図り、世界のより多くの異文化と関わるためである。第2に、日本と離れた場所にある発展途上国が、日本の影響をどのように受けているか実際に確かめるためである。第3に、日本との相違点および共通点を調べるためである。第4に、NGOが実施する実習に参加し、活動現場を訪問することでNGOがどのような活動を行う組織であるかを学習するためである。第5に、先進国に住む私たちが発展途上国であるタイに行き、実際の現状を確かめることによって、自分たちにできることがないか、できることがあるとすればそれは何であるかを考える機会とするためである。

期待される成果としては、私たちが持つ発展途上国に対するイメージが現状と同じものなのか確認し、自分たちの暮らしや立場を見つめなおし、地球規模で起きている環境問題などについてより深く考えることができることである。

1.2　シャンティ山口のタイ山岳民族支援活動

シャンティ山口は、タイ北部の山岳民族であるモン族の村の支援活動を長年続けてきた。タイの人口は6500万人で、タイ族が人口の85%を占め、その他にも華人系、マレー系、インド系、カンボジア系を中心に様々な民族で構成された多民族国家であり、モン族は15万人程度に過ぎない。[1]その中でもシャンティ山口がモン族を支援しているのは不幸な歴史的な背景があるからである。

モン族がタイに移住し始めたのは、ラオス内戦中の1960年代である。当時反タイ政府組織がタイ北部の山岳地帯で盛んに活動していたことと重なって、モン族をはじめ山岳少数民族が反政府組織に加わることを恐れるタイ政府により山岳少数民族の強引な定住化政策がとられた。しかしながら現在では、少数民族に寛容であることと、モン族自身が政治的活動をせず、内部抗争もなく暮らしていることから、現在では山から下りて定住している。一方、タイ政府に定住化を求められながらも、未だに山の中で暮らしているモン族も多く存在し、彼らは低地に定住しているモン族よりも多い。定住しても農地は少ないため収入はタイ人の10分の1以下という村落ばかりで、多くが貧困生活にあえいでいる。

現在実施しているプロジェクトは以下の3つである。第1に、パヤオ県ポン郡に、学校に行きたくても行けない子どもたちのために建設した学生寮の運営を支援している。これについては、4.1で詳細を述べているのでそちらを参考にされたい。

第2に、トイレがなく不衛生な村に、各家庭に1つずつ、生物多様性を利用した「自然循環式多目的バイオトイレ」を建設している。これはシャンティ山口が開発したもので、糞尿をタイの高い気温を利

[1]在京タイ王国大使館　http://thaiembassy.jp/index/j-index/j-index.htm　(2011/10/12最終アクセス)

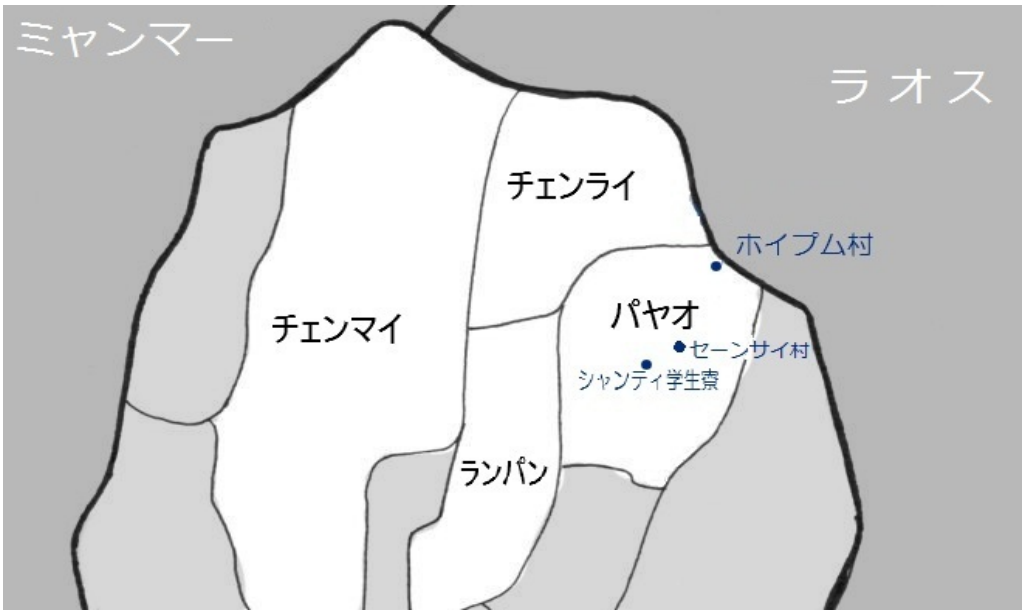
用してメタンガスを発生させそれを燃料として調理に使用し、そこで分離されたものは肥料として利用できるものである。残った水は大腸菌が死滅するので安全で、飲み水として利用することも可能である。資材はすべてタイ国内で調達できるものを使用しており、建設はシャンティ山口が独自に行うのではなく、現地の村人との共同作業で行っている。

第3に、ホイプム村の支援を行っている。これについては、3.2で詳細を述べているのでそちらを参考にされたい。

1.2 スタディツアーの日程・地図

8/18(木)	09:30 19:40	福岡空港　JALカウンター前集合 福岡空港発(TG649)－バンコク乗継－チェンライ着	ホテル泊
8/19(金)	08:30 16:00 20:00	チェンライ出発 シャンティ学生寮到着 シャンティ寮生との対面式	学生寮泊
8/20(土)	06:00 21:00	シャンティ寮生とランパンへ郊外学習 シャンティ学生寮到着	学生寮泊
8/21(日)	午前中 13:00 15:00 20:00	シャンティ寮生との交流 セーンサイ村文化センター・図書館 シャンティ寮生との交流 シャンティ寮生との異文化交流会	学生寮泊
8/22(月)	10:00 15:30 17:00	シャンティ学生寮出発 ホイプム村到着・保育園交流 ホストファミリーとの対面	ホームステイ
8/23(火)	08:30 10:30 12:00 17:00	ゴミ調査 農業センター視察 各自ホストファミリーとの交流 ホイプム村ホストファミリーとの交流会	ホームステイ
8/24(水)	09:00 15:30 18:00	ホイプム村出発 チェンマイのホテル着 ナイトバザール見学	ホテル泊
8/25(木)	08:30 09:00 21:00	ホテル出発 ドイステープ寺院など見学 チェンマイ空港発	機内泊
8/26(金)	00:50 08:00	バンコク発(TG648) 福岡空港着(解散)	

※18日の福岡空港集合時間、および26日の福岡空港着の時間は日本時間、それ以外はすべてタイ現地時間である。



出典：Google Earth，および佐伯昭夫氏の地図に基づき筆者作成

＜淤見悠＞

１．　日本とタイの比較

ここでは、私たちが見てきた日本のタイへの影響、日本とタイとの相違点および共通点を述べる。

第 1 に、日本のタイへの影響が顕著であった。タイではトヨタ、日産、ホンダなど、多くの日本車を見かけた。日本では農作物を運搬するためには軽トラックをよく見かけるが、タイでは都市部でも地方部でも ISUZU のバンが多く走っていた。一方、タイの空港などには、フォードやフォルクスワーゲンなど外国車の広告が掲示されていた。

第 2 に、日本とタイの相違点についてである。まず、国王に対する敬意の表し方である。タイでは、町中のいたるところにプーミポン・アドゥンヤデート国王(通称、プーミポン国王)の写真が貼られていた。研修中に訪れた飲食店の中には、壁一面に国王の写真が飾られている店もあった。また、日本の紙幣には歴史上の人物である福沢諭吉や野口英世らの肖像画が描かれているが、タイの紙幣には全てプーミポン国王の肖像画が描かれていた。日本では天皇の写真や肖像画を飾っている場所はあまり見かけないが、タイでは国王の敬愛の表し方として、国王の写真や肖像画を飾るという風潮があるように思えた。次に、タイと日本と技術の違いである。タイの田舎の町では、建造物を立てる時、日本と違い足場を鉄やアルミ材などではなく、竹や木を使って足場を組んでいた。

第 3 に、タイと日本では、地域格差という共通点があった。都市部には人が集まり、発展を遂げているが、一歩都市から離れると、廃れつつある町の風景を目にした。タイの都市部では外資系の大型スーパーや、セブンイレブンなどのコンビニが 1km 間隔であり、現在の日本の状況と変わらなかったが、田舎の町並は戦後まもなくから経済成長期に入る頃の日本の歴史を再現した映画の 1 シーンのようで、清潔とは言い難い市場や屋台がたくさんあった。また、日本の都市にも浮浪者がいるように、タイの都会の街中では物乞いをする人を見かけた。また、日本でも問題になっていることだが、病院に行けないと思われる人を見かけた。特にタイの田舎の村では医療の進歩が遅れているために、病気をしている人は、悪化したままの状態で過ごしていた。白内障の人もいれば、足を引きずらせながら歩いている人、手作

りの車椅子に乗っている少年なども見かけた。さらに、タイでは、病院までの距離が遠く、病気になってもすぐに病院に行けない状況を見た。

＜中野理沙＞

２．　ホイプム村環境調査

3.1　ゴミ調査

スタディツアーの課題の１つであるホイプム村での環境調査を実施するにあたり、ゴミ調査を行うことに決定した。ゴミ調査に決めた理由は 4 点ある。第 1 に、シャンティ山口佐伯氏からの助言に従い、村に還元される調査であるということである。第 2 に、ホイプム村では、ゴミは日本（山口市）のように細かく分別されておらず、道などその辺に捨てることが自由で、それを拾う文化は無いということである。第 3 に、私たちが現在持っている知識と技術でできるものであるということである。第 4 に、調査時間は 2 時間弱と限られていることである。村に「還元」することおよび村人のごみに対する意識改革を最終目的とし、村のゴミの現状を把握するためにゴミ調査を行った。

ゴミ調査は、ホイプム村に移動した翌日 8 月 23 日 8 時 30 分～10 時の約 1 時間半行った。調査範囲はホイプム村全域である。調査方法は、村を歩いて回り、道に落ちているゴミを燃えるゴミ、ビニールゴミ、缶・ビン、およびその他の 4 種類に分別しながら拾い、それぞれの重量を測り、それらがどのようなゴミでどのような場所に捨てられているのかを記録した。調査者は、私たち 5 名で、内 1 名が記録を取り、内 1 名が写真撮影を担当した。ゴミ拾いには、引率教員 1 名、シャンティ山口スタッフ 4 名、および保育園の教員 1 名と年長児童 15 名程が参加した。

調査結果は以下の 3 点である。まず第 1 に、集めたゴミの総重量は約 100 キロで、ゴミのほとんどが、食品や菓子の外装のビニールゴミであった。ゴミ袋は中身が見えるように透明のものを日本から持参したが、持参したものでは足らなかったため、現地の黒のビニール袋も使用した。ビニールゴミ以外にも数は少なかったが、タバコの吸殻や空き缶、ガラスの破片があった。

第 2 に、民家の数とゴミの量が比例していた。ゴミがよく落ちていた場所は、人通りの多い通路や民家が多く集まっているところで、道の真ん中や道端に多く落ちていた。ゴミ箱を設置している家庭もあったが、その数は非常に少なかった。一方、村の東の方には民家が少なく、ほとんどが畑のため、ビニールゴミは減り、肥料が入っていた大きな袋が目立った。ただし、ホイプム村では犬が放し飼いにされていたため、犬がゴミを山や川へ持っていくこともある。

第 3 は、捨てられた時期に差があった。バイクや車のタイヤで何度も踏まれたことにより土に埋もれているものや、石の下にあるもの、見た目がきれいなものまであった。

タバコの吸殻に関しては、もし乾季に火の消え切っていない吸殻が、竹や木で作られている民家に引火した時のことを考えると、大変危険である。空き缶やガラスの破片に

関しては、それらが道に捨てられているのは子どもたちの怪我が心配である。多くの子どもたちはサンダルを履いて行動していたが、中には裸足の子もいたので、破片で足を切ってしまうことも考えられる。さらに、肥料が入っていた袋については、人体に影響を及ぼす農薬も含まれており、非常に危険である。

私たちがゴミを拾っていたら、途中から保育園児が手伝ってくれた。小さい頃からゴミを拾う習慣をつけたら、自分たちが捨てたゴミを拾うのは自分たちであるため、ゴミを捨てなくなり、ゴミを持ち帰る習慣がつき、ゴミが落ちていない村になるのではないかと考える。

ではなぜごみが落ちている状況になったのだろうか。以前のごみは食べ残しや、果物の皮など土に還るものが主流だった。しかし、技術が進歩した結果、ビニールごみ、缶やビンといった土に還ることのできないごみが増えてきて、村人たちはそれらのごみを以前のものと同様に扱っているから、ごみが目立つようになった原因の 1 つではないかと考えられる。この問題はホイプム村だけの問題だけでなく、ここ日本をはじめとする世界全体の問題でもある。

3.2　農業センター視察

バイオ燃料としての需要が高い、輸出用の遺伝子組み換えトウモロコシがホイプム村に流入し始めたのは約 3 年前で、ホイプム村の環境破壊に繋がっている。まず、山を切り開いてトウモロコシの栽培を拡大するために、強引な森林伐採が行われ、山の保水力が失われたため洪水が頻発するようになった事により表土の流出も伴っている。加えて乾期には、生活用水も減少している。また、多量の除草剤を使い、トウモロコシが育つ環境を整えたため、土地がやせてしまった。さらには、その農薬が原因と思われる肺疾患や関節の痛みなどの健康被害が出ている。

トウモロコシ栽培のために焼いた山

この一帯を再び樹木で覆うことが目標だ。

そこでシャンティ山口が現在農業センターで実験しているのが「アグロフォレストリー」である。[2]アグロフォレストリーとは、「農業（agriculture)」と「林業（forestry)」を合成した言葉で、「混合農業」のことである。森林破壊をせずに森を作りながら、作物を生産する方法である。樹木作物を中心に植栽し、樹間で動植物を育成する農法で、同じ土地で、樹木やその他の農作物などを同時に育てることが可能である。

ホイプム村の現状を打破するために、遺伝子組み換えトウモロコシの代わりに、果物や野菜など収穫物のなる苗木を植栽し、緑あふれる農地の回復をはかっている。現時点で有力とされている品種は、マンゴーとマカダミアナッツである。マンゴーはもともとは自産自消のために栽培されていたが、値崩れしにくく、多く収穫できるため、村の中だけでなく、他の地域や外国に輸出することで現金収入を得ることができる。マカダミアナッツは、ケシの代替えとしてタイ国王が推進するプロジェクトの１つとされているものである。

---

[2]アグロフォレストリーという発想　http://www.nishigaki-lumber.co.jp/himorogi/bun/19.htm　(2011/8/31 最終アクセス)、Media Sabor　http://mediasabor.jp/2008/05/post_395.html　(2011/9/8 最終アクセス)、NPO 法人アルコイリス　http://www.arcoiris.jp/　(2011/9/8 最終アクセス) 参照。

苗木を植えたら、木になって落ちた実を拾うだけなので手間がかからず、かつ高値で出荷できる。その他にも、かぼちゃ、コーヒー、ゴムやロンガンなどもある。まだ試験的段階であるため、遺伝子組み換えトウモロコシに頼らざるを得ない状況ではあるが、将来は果物や野菜の栽培で生活が安定するとともに、森林も蘇り緑豊かな村になるだろう。

＜廣實大樹＞

３．　現地での交流

4.1　シャンティ学生寮

4.1.1　寮生との交流

シャンティ寮は、村に通学できる学校がなく、学校に行くための経済力がない、しかし学校に行きたいという情熱を持つ子どもたち男女合わせて 47 名が生活している学生寮である。学費が払えないため大学を断念する生徒が多い中、毎年奨学金を得て教員や看護師、日本語通訳になるために大学に進学する生徒もいる。寮生はモン族をはじめアカ族、リス族、タイヤイ族など少数民族が入寮している。

ここでは、生活、言語・コミュニケーション、および伝統文化について順に説明する。

まず、生活について、寮生は大変礼儀正しい。彼らは学校に行く前と帰った後に１人が寮の職員に対し事務所に来て挨拶をする。私たちに対しても同様に丁寧に挨拶してくれた。また、タイには「いただきます」の習慣がないにも関わらず、寮では食べる前に感謝の意を唱えていた。寮生は食事の準備や後かたづけを自分たちで行う。私たちも夕食作りに参加した。包丁はナタのような大きなものを使用していたので、私たちは野菜を切るにも苦労したが、体の小さな男の子や女の子でも寮の池から取ってきたばかりの新鮮な魚や豚肉の塊を上手にさばいていた。食事の際はスプーンとフォークを使ったり、素手で食事をとったりすることもあるなど、文化の違いを感じた。週末は寮とその周り掃除を行う。寮は男女で棟が分かれており、高校生全員で１部屋、中学生全員で１部屋となっていて、１人ずつひとりベッドとロッカーが与えられていた。みな整理整頓されており、とても質素ではあるが、それぞれが自由に自分のスペースを飾っていた。その中には、「ドラゴンボール」や「ハローキティ」などのシールやポスターが貼られているものもあり、現代の日本の影響が見受けられた。

次に言語・コミュニケーションについて述べる。彼らはタイ語を常用語として使用していた。私たちとコミュニケーションをとる時は簡単な日本語、英語、中国語など、多彩な言語を使って話そうとしてくれていたので、私たちも伝わるように、ジェスチャーと『旅の指差し会話帳』（加川、2011）を使って、一生懸命自分の気持ちを伝えた。会話の内容は、私たちが普段話すことと変わらず、互いの家族、恋愛、音楽の話が多かった。ただし、スポーツのルールは世界共通であり、言葉が伝わらなくても気持ちが通じ合うので、一緒に行った卓球やサッカー、バレーボールなどのス

ポーツでは大変盛り上がった。

最後に伝統文化については、彼らは民族の踊りを練習して、伝統文化を守ることに積極的だった。一方で、伝統文化を守るだけでなく、最近の流行の踊りを踊ったり、民族衣装を長いスカートをミニスカートにしてアレンジして楽しんだりする人もいた。

4.1.2　寮生との交流会

21 日の夕食後、交流会を行った。お互い準備したものを交互に出しあった。寮生はモン族、アカ族、リス族、タイヤイ族など、それぞれの民族衣装の説明をしてくれた。どの民族衣装も、それぞれの特徴がよく現れていた。例えばモン族の民族衣装は、銀細工や色鮮やかな刺繍を施していた。その後民族のダンスや、民族の楽器であるケーンを使った演奏を披露してくれた。民族のダンスは私たちも一緒に踊った。私たちの出し物は、ジェスチャーゲーム、お手玉、動物バスケット、ダンスだった。どの出し物も全員が楽しんでくれたので、非常に嬉しかった。寮生全員が楽しんでくれて、私たちもとても楽しい時間を過ごすことができた。

4.2　ホイプム村

4.2.1　保育園での交流会

山岳民族モン族の村であるホイプム村に到着してすぐ、保育園で交流会を行った。保育園はシャンティ山口の支援によって作られたものである。園は村にいる子どもたち 26 人で構成されていて、年少組と年長組の 2 クラスに分かれ 1 人ずつ先生が担任している。壁には児童の作品がきれいに飾られ、日本の保育園と変わらないように見受けられる。学習机やいすはなく床に座ったり寝転がったりして学習していたが、学習用品はかなり充実している。エコトイレの横にメタンガスを利用した給食用のコンロと食堂、および歯磨きと水浴びをすることができる水場が設置されている。

私たちは園児と鳴き声ゲームおよび紙飛行機ゲームを行い交流した。鳴き声ゲームでは動物の鳴き声の表現方法が異なっている。犬、猫、象、鶏、牛を取り入れた。子どもたちは鳴き声だけではすぐに分からない事が多かったため、ジェスチャーも鳴き声に合わせて行うことで、答えを探し楽しんでいた。モン族では鶏は「ガガガッガー」となくという事が分かった。紙飛行機ゲームは、日本の文化である折り紙を使って、紙飛行機を作り飛ばして遊んだ。モンの子どもたちにとって初めて作る紙飛行機を教えるのは苦戦したが、子どもたちは楽しそうに紙飛行機を飛ばしてくれた。

＜神屋有紗＞

4.2.2　ホームステイ

私たちは 22 日から 24 日の間、ホイプム村でホームステイを体験した。家屋は竹でできているものからコンクリートの壁でできているものまでさまざまである。村には多くの犬と鶏が放し飼いにされている。民家は山の頂上に位置し、いかにも山岳民族らしい村である。外灯のない村では、晴れた時には星がプラネタリウムのようにはっきり見える。一方、最近では情報を得るためのテレビやラジオ、携帯電話を持っている家も多い。外灯はないが、多くの家庭には、タイ政府支給のソーラーパネルを使った蛍光灯がある。

トイレはほぼ 1 世帯に 1 つ離れに設置されている。シャンティ山口が支援したエコトイレの他に、穴を開けセメントで固めただけの便器や、セメントの上に便器を設置したものなどがある。トイレの壁は竹の隙間から見えそうなものからコンクリート製のものまである。水道は、川の水がそのまま流れてくる。沐浴はトイレにある水道水を使用するか、水道水がない時には川で沐浴をする。山の頂上に住んでいるとはいえ、川の水や水道水にはどのような水が流れてきているかわからないため衛生かどうか水質に不安がある。佐伯氏によると、生水飲料のため下痢・腹痛など健康障害が目立つとのことである。村には医療機関や薬がないため、食べ物や伝染病により高熱におかされて手遅れとなり脳障害が出るケースもあるようだ。

小さな子どもがいる家庭も多数あったが、村には学校がないために、小学校になると子どもたちは勉強するために家を出て、親戚に預けられたり寮に住んだりして学校に通う。そのため、村には小学生以上の子どもがいなかった。中には休みの日には村に帰ってくる子どももいるという。

モン語を知らない私たちは、ジェスチャーがコミュニケーションの手段であったが、文化が違うとジェスチャーで伝えることは簡単ではなかった。家族の中で比較的若い人は学校に行ったことがあり、タイ語が分かる人もいて、『旅の指差し会話帳』（加川、2011）がとても役に立った。そのおかげでお互いのことを少しでも話すことができた。

年配の女性たちは、農業と両立させて、モン族の伝統刺繍を活かした小物を作り、それを市場に出して生計を立てている人が多い。私たちも少し手伝わせてもらった。また、このように時間をかけて作ったものを私たちにプレゼントしてくれた人もいた。

食事は白米と 2〜3 品のおかずである。主に野菜を使ったスープ、材料そのものに塩味を足した料理である。私たちはそれぞれ客人をもてなす料理である鶏を使った料理をふるまってもらった。その他には、魚料理もあった。魚を揚げる時は、日本では粉をつけたっぷりの油の中で揚げるが、ここでは、臓器を取り、なにも味付けをしないか塩を振った魚を少量の油の中で焼く。調味料は種類も量も少ない。村には店がなく、調味料はとても貴重なため、最小限しか使用しない。今回、私たちはお世話になるお礼として、日本料理を 1 品ふるまうことにしていた。私たちの作ったパスタやおにぎりをホストファミリーは「おいしい」と言って喜んで残さず食

べてくれた。文化が違っても、相手が一生懸命作ったものを受け入れる文化は日本と同じであった。モン族の人は訪問者を快く歓迎してくれる、素直で純粋な民族であると感じた。朝ごはんを家族以外の人が飛び入り参加で食べたり、どの子どもも自分の子どものように可愛がったり、時には叱っている。イベントの際は全員が協力して、準備や後片付けをする。このような姿から、村人たちが 1 つの家族のように見えた。私たちが保育園に行く時などに送り迎えをしてくれたのも、ホストファミリーである。まるで我が子を学校に送り迎えするような優しい対応をしてくれた。

どの家庭も決して裕福な家庭ではなかったため、私たち大人が 1 人生活に加わることは負担になったはずだ。言葉も通じず、生活様式も違う私たちの世話は楽ではなかったに違いない。しかし、たった 2 日間の家族であろうとも、私たちをいつも笑顔で受け入れてくれた。そして、できるだけの贅沢をさせてくれた。私たちはそれに感謝し、できる限りのお手伝いをした。言葉が伝わらずとも、進んで交流し、2 日間のうちに親密な関係になれたと感じている。そのため別れがとても辛かった。2 日間の思い出がよみがえり、帰りたくなかった。ホストファミリーの方たちも「また来なさい。」と言って涙をながしてくれた。そして、途中で食べるための昼ごはんまで持たせてくれた。

4.2.3　ホストファミリーとの交流会

交流会は餅つき大会から始まった。餅をつく際、木で作った杵（きね）と臼（うす）を使用していた。餅をつくのは、日本と同じく男性だった。ただし、横で餅をこねる人はおらず、2 人で杵をつく。ついた餅は、固ゆでした卵の黄身をつけ、抗菌作用のあるバナナの葉に包み、それを手で少しずつちぎりながら、練乳につけて食べた。日本の文化とは大きく異なり驚いたが、おいしく、くせになる味であった。餅つき大会の後は、ホストファミリーのお母さんたちが用意してくれた料理を食べた。モンの質素な伝統料理とは異なり、様々な調味料を使った豪華なタイ料理だった。食事中は皆が一体となり、家庭どうしの壁が薄いと感じた。

夕食後、交流会を開始し、お互いの出し物を見せあった。モンの伝統舞踊を一緒に踊った。私たちはゲームとダンスを披露した。ゲームは人数が多く全員でやるには無理があったが、見ている側も楽しんでくれていた。ダンスは日本の伝統的なものではなく今流行しているダンスを披露した。軽快な音楽と歌に合わせ、大人も子供も微笑みながら見てくれた。

＜福田美佐子＞

４．　本当の援助とは

私たちは、実際にスタディツアーに参加する前は、援助を「自分たち」の軸を中心に考えていた。たとえば、自分たちには豊富な物資や資金があるのでそれらを現地の人たちに分け与えること、あるいは、自分たちがあると便利だろうと考える技術などを現地に提供することなどである。しかし、現地の人を軸に考えなければ、その行為は、1 つの文化の崩壊を招きかねない。

大切なのは、実際にそこに住む人たちが、自分から望むことを聞き出すことである。しかしながら、全てを私たちが「してあげる」のではない。相手の立場に立ち、その時点で彼らが最も必要としている物を見つけ、共に協力し作り上げることである。あるいは、彼らが自発的に考え、学ぶことができる教

育の場や機会を提供したりすることである。現地の人たちが知識や技術を身に付けることが大切である。そのためには、まず現地に行き、その土地に必要なものを私たち自ら学ぶ必要がある。それにより、本当に必要とされる支援と援助ができるための体勢が整えられる。

さらに、継続して行うこともまた重要である。1 度行っただけでは、現地には何も残らず無駄になることも多い。新たに行ったことが現地に定着し、現地の人たちが自立できるまで、私たちが指導したり、あるいは見守ったりするべきである。その段階にまでたどり着くためには、現地の人と私たちとの信頼関係が不可欠である。

援助とは、人の心である。心と心を繋ぐこと、心で寄り添うことである。それは、離れていても側にいると感じさせることや、世界には自分だけが存在しているのではないと思わせることである。このような真心を持って初めて、「援助をする」ということのスタートラインに立つことができる。

５．　まとめと今後の課題

私たちの中には、少なくとも偏見が存在している。それは、今回のスタディツアーで言うならば、タイは発展途上国だから、私たちは色々な面で不自由な生活を送らなければいけないというイメージがあったということである。しかし実際に行ってみると、現地の人たちはとても明るく気さくで、私たちは誰 1 人として、環境の変化により体調を崩すということもなく過ごすことができた。このような経験を通じ、実はそれぞれが抱くイメージは偏見であるということを知り、その土地のことを 1 つの角度からではなく、多角的に見て、現状を知ることが大切であるということを学んだ。

このスタディツアーが、私たちの価値観に大きな変化をもたらしたことは確かである。それを自分たちの中だけで終わらせるのでは無駄になる。この便利で飢えのない生活が、発展途上国の上に成り立っているということを忘れず、人々が地球に共存できる環境を築こうと努力することが、日本の外に目を向ける機会を持った私たちにできることの 1 つである。例えば、NGO が出店するフェアトレード商品を日本人に売るお手伝いをしたり、来年度地域実習 II を履修し再度現地を訪問したり、あるいは NGO でインターンをさせていただくことも可能であろう。

＜淤見悠＞

参考文献・資料

[1]加川博之『旅の指さし会話帳』情報センター出版局, 2011

[2]Media Sabor　http://mediasabor.jp/2008/05/post_395.html　(2011/9/8 最終アクセス)

[3]NPO 法人アルコイリス　http://www.arcoiris.jp/　(2011/9/8 最終アクセス)

[4]NPO 法人シャンティ山口　http://www.shanti-yamaguchi.com/　(2011/9/26 最終アクセス)

[5]アグロフォレストリーという発想 http://www.nishigaki-lumber.co.jp/himorogi/bun/19.htm　(2011/8/31 アクセス)

[6]在京タイ王国大使館　http://thaiembassy.jp/index/j-index/j-index.htm　(2011/10/12 最終アクセス)

主要面談者

[1]特定非営利活動法人シャンティ山口事務局長・理事　佐伯昭夫氏

[2]NGO ネットワーク山口副会長、山口県協力隊を育てる会副会長　荒瀬澄枝氏

[3]シャンティ山口現地スタッフ 4 名

[4]シャンティ寮のスタッフ 3 名および寮生 47 名

[5]セーンサイ村文化センター・図書館長

[6]ホイプム村ホームステイ受け入れ家族 6 世帯

―環境衛生活動募金にご協力をお願いします。―　2011.10.15saeki